

# 雜 錄

## 第八回國際哲學大會

(Der VIII. internationale Philosophen-

Kongress)

一九三四年九月二日より七日までプラハに於て開かれる第八回國際哲學大會は、總ての哲學の専門家のみならず、各自の活動圏内に従事しながら哲學に關心を有せられる諸氏の參加を要望してゐる。本會は學問の國際的統一を證示し、かのプラトーンが説ける哲學の世界支配といふ使命に對する我々の信念を新にし、思想界に於ける最近の進歩を報告し、會員の自由なる論議によつて將來哲學の進むべき道を明かにせんとする。

かゝる意圖によつて開かれる大會の一般的論題として、(一)自然科學の限界、(二)認識に對する論理的分析の意義、(三)記述的及び規制的社會諸科學、(四)宗教と哲學、(五)民主主義の危機、(六)心理學及び教育學の諸問題、(七)現代に於ける哲學の使命、が掲げられてゐる。

一九〇〇年巴里に於てはじめて開かれ、一九〇四年ジュネーヴに、一九〇八年ハイデルベルクに、一九一二年ホロニアに、大戦後一九二四年ナポリに、一九二六年ハーワードに、一九三〇年牛津に會を重ねること既に七回、我が國に於ても古くから「萬國哲

學會」の名によつて知られる本大會が、學者の國際的協力によつて當初の目的を達成され、その輝かしい歴史に相應はしい成果を收められんことを切望して已まない。

因に本會への申込は Der vorbereitende Ausschuss des VIII. internationalen Philosophen-Kongresses, Prag 1, Smetanovo nám. 宛の。

## ローレンツ著作集

最近半世紀程理論物理學の研究が、その廣さに於て又深さに於て、目覺しい進展を遂げた時代はない。そして、ローレンツ(一八五三—一九二八年)こそ、この五十年間に物理學が進んだ道を、自ら歩んだ人である。斯學の主要な問題で、彼の研究の對象とならなかつたものは殆んどないといつてよい。又、如何なる部門に於ても、彼は王者の威嚴を以て主題と方法を支配してゐた。併し、特に彼が指導者の位置を占めたのは、自らが開いた電子理論による電磁氣學及び光學的現象の研究である。この分野に於て、彼はマックスウェルの電磁説の後継者であり、アインシュタインの相對性理論の先驅者であつた。

彼はその著作に於て、工匠の名を恥かしめない、彼の諸問題、それを攻究する充実な方法、その解決、未解決な諸問題の俊敏な定立を示してゐる。併し自分で手を入れて出版した論文集講演集はいはゞ完成せる彼の姿を見せるのみで、それらによつては彼が歩んだ辛苦の道は隠されてゐる。たゞ、彼の諸論文のありしまゝ、

の集成のみが、如何にしてローレンツが成長したか、又如何にして物理學が彼と共に成長したかを示すであらう。例之、一八九〇年頃の諸論文を同時代のハインリッヒ・ヘルツの研究と比較し、それから、一方彼自身の學位論文（一八七五年）を回顧すると共に、他方數年後（一八九四—一九〇四年）に出た運動體に關する電磁氣學的及び光學的諸理論を期待することが出来る。又、ローレンツのホール効果に關する論文（一八八四年）は、カメルリンク・オannesを電磁光學に關する研究に導き、それはかのゼーマン効果の發見（一八九六年）に動因を與へたが、併し、この發見なくしては、ローレンツの最も貴重な研究の一であるゼーマン効果の理論は成立しなかつたであらう。

この偉大な學者を記念すべきメモメントであらうとする本著作集は、未だ書冊の形で現れてゐない論文の總てを包含し、全九卷より成る。その中最後の三冊は講演集に充てられてゐる。學位論文は和蘭語の外に、佛譯を附せられるが、他の學問的な論文は總て英、佛、獨語の何れかで刊行されることになつてゐる。編輯者はゼーマン、エーレンフェスト、フォックケルの三教授である。

各卷三五〇乃至四〇〇頁より成り、分賣も可能である。（假綴一〇、布装一二ギュルテン、併し、全集の豫約者は全卷七五又ば九〇ギュルテンの特典を有する。第一卷は既に刊行された。

Oeuvres diverses non encore recueillies en volume par H. A. Lorentz. En 9 volumes. Ia. Haye: Martinus Nijhoff.

### 若きデイルタイ

個人の精神にせよ、一般的な精神運動にせよ、歴史的存在の生成期の研究に耽ることは、哲學者として又歴史家としてのデイルタイの特異な學風の一つをなすものであつた。彼は、或る性格が生成され、異なる諸要素が融合して、一つの全體にまで高められる時期に着目した。實際、端初を知ることは全體を知ることである。彼のヘーゲル及びシュライエルマツヘルの青年期の研究は、かくの如き關心から着手されたのであらう。デイルタイがそれらに於て示した方法に従つて、彼自らのユーゲント・ゲシヒテを書くことは今日我々にとつて興味の深いものであらう。

尤も彼は長い生涯の經驗によつて著しい發展を遂げ、彼の多くの未完成に終つた著作とそれ等に對する改稿の草案とは、日々新に學びつゝ、老い行く彼の姿を示すものであるが、併し彼の哲學の主要問題と思想の動向とは、既に青年期に於て現れ、彼の一生の課題と將來の研究の計畫とは決定されてゐた。實際、彼自らが語つたといはれる如く、彼の一生の創造は、本來的には、彼の少壯時の思索と計畫との遂行に過ぎなかつたのである。

併し、我々がこの時代のデイルタイに就いて知り得ることはあまりにも制限されてゐた。尤も、一八五四—一六四年間の日記の選擇は「エチカ」の名の下に出版されてはゐたが、今日我々の容易に入手し得るものではなかつた。しかるに、昨年デイルタイ生誕百年を祝して「二〇〇の感謝すべき寄與がなされてゐる。即ち一つは、彼の娘クララ・ミッシュュによつて、多數殘存する書簡中彼の若き貌を興へるに適しいところの一五五通に、彼の日記の拔萃を附

して、「若きテイルタイ」の名の下に公にされた。それは、彼の學生時代の初（一八五二年）から、彼の最初の大部な著作、シュライエルマッヘル傳の出版（一八七〇年）に至るまでの彼の全貌を示してゐる。他は、伯林學士院の報告の一冊として、公にされた一八五九—六四年間に於ける、同郷の音樂家ベルンハルト・シヨルツとその妻レイーセ宛の書簡集である。これらの書簡集に於て既に、「體験と詩」「獨逸文學及び音樂考」の著者の藝術に對する鋭き理解が現はれてゐる。

併し、我々の注意を最も惹くものは、彼の卓絶せる人格の中に時代全體が映されてゐることである。それは、かのニイチエが、「獨逸哲學の蜜月」と呼んだ觀念論哲學、形而上學體系に對する反抗の時代であつた。それは、自然科學、唯物論、實證主義、相對主義の時代であり、フオイエルバッハ、コント、ミル、スヘンサー等が思想界に君臨してゐた。哲學は諸科學の結果を組織し、統一し、或はその基礎を据ゑる「諸科學の下婢」である地位に墮され、あまりにも甚だしい運命の轉變を數ければならなかつた。併し、物質ではない存在があり、自然法則ではない法則がある以上、それを對象とする科學がなければならぬ。かゝる時期に獨逸歴史學派は榮え、テイルタイが學んだ前後の伯林大學の幾多の輝ける史家に於てその頂點に達してゐた。彼が、それらの學者から決定的な影響を受けたことは、後年彼自らの認めるところである。

カルザイン派の牧師の家に生れ、元來聖職に就くことになつてゐた彼は、數年間眞理への熱情を擧げた神學には滿されず、哲學

へ向ふに至つたと告白してゐる。既に一八六〇年の日記によれば、彼は宗教的なる生の最も内なるものを歴史に於て理解せんと欲し、西洋の基督教的 worldview の歴史と、哲學的宗教的（詩作的）精神の、諸體系の生成の歴史的（心理學的）包括による、批判的研究とを計畫し、それを、我々の歴史的・哲學的世界觀に基く「新しき純粹理性の批判」であらしめようとする。同じ年の日記に「現代獨逸精神の動向は人間を本質的に歴史的な存在として把握することである。そして、かゝる存在はたゞ社會に於てのみ實在する。かゝる諸社會の認識によつて、宗教的社會的思想の諸世界は、再び生かされなければならない」といつてゐる。かくして、歴史學をその全部門に互つて包含すると同時に、人間と社會とに關する體系的諸科學をも含むところの、彼自らが「精神科學」と呼んだ諸科學の有機的統一を目指すに至つたのである。

Der junge Dilthey: Ein Lebensbild in Briefen und Tagebüchern, 1852—1870. Zusammengestellt von Clara Misch geb. Dilthey. Leipzig & Berlin: P. G. Teubner. Rm. 6.80

Briefe Wilhelm Diltheys an Bernhard und Luise Scholz, 1859—1864. Mitgeteilt von Siegfried v. d. Schulenburg. Sonderausgabe aus den Sitzungsberichten der Preussischen Akademie der Wissenschaften. Phil.-hist. Klasse, 1933, X) Berlin: Walter de Gruyter & Co. Rm. 3.50

シューペンハウエル全集の續刊

暫らく中絶してゐたドイセン版ショーペンハウエル全集は昨秋第十五巻を出した。それは書簡集第二巻であり、彼の晩年十二年間に於ける往復書簡を含んでゐる。尙ほ、書簡に對する註釋並びに總索引は近く刊行を豫告してゐる最後の一卷に譲つてゐる。

そこに我々が見出すのは、あまりにも人間の老ショープンハウエルの姿である。現實にありし彼と、彼の哲學が説ける人間の理想的な像とのあまりにも甚だしき乖離である。彼の哲學に従へば個體化の原理は現象界の假象であり、自己中心主義は一切の不道德の根源である。己の同胞を己自らと感じ、彼に奉仕し、彼との内的結合に到るのが道德的善である。しかるに、彼の書簡は、利己的醜慮の表現以外の何物でもない。物質的幸福に對する念願、疫病を前にしての傷しき不安、自己の著作の普及に關するはかなき希望、とるに足らぬ批評をさへ氣遣ふ心、これ等は、虚妄の世界を超越した哲學者の明澄な靜安の對蹠的なあり方である。世の無常を達觀した筈の老哲學者は、無爲に生き長らへんことをさへ希つてゐる。書簡を通じて見られるショーペンハウエルは、同胞に對する愛を全く缺く、利己的な一個の市民に過ぎない。彼によつては、衷心からの、やさしい言葉は決して語られず、愛と友情の關係は少しも見出されない。それは孤獨の哲學者の存在の驚くべき荒涼とたましひの貧困との恐るべき證據である。

さて、この哲學と生活との乖離は何に由來するのであらうか。彼の「意志と表象としての世界」の思想建築は、狭小なる自我を超越せんとする實踐的努力を缺く、峻嚴なる論理の産物に過ぎな

つた。彼が若くして案出したこの世界像は、彼の生活の外に獨立自存する一つの存在であり、そして彼の生活は、それをば博い讀書によつて得た新しい論證、註釋、引用等によつて整備することに満足した。彼は、來るべき諸世紀に、決定的な思想方向を與へ得る世界像を建設したと自負してゐたが、彼は一つの學派をも有せず、徒に自己を滅却する區々たる追従者を出すに過ぎなかつた。人間としてのショーペンハウエルと哲學者としてのショーペンハウエルとは正しく、人間の生活態度の兩極端である。そして、その兩極端を通じるものは、ニイチエが「獸と神との間の橋」と呼んだもの、即ち同時にこの二つの領域に屬する人間の本质である。

Arthur Schopenhauers Werke, Hrsg. v. Paul Deussen, Bd.

15: Der Briefwechsel Arthur Schopenhauers, Hrsg. v. Arthur

Hübner, Bd. 2, München: R. Piper & Co., Brosch. Km.

1800

### ヘーゲル・レクシコン

グロツクネル編記念版ヘーゲル全集は、その補卷としてヘーゲル・レクシコンを出すことを豫告してゐたが、今度その計畫の詳細を發表した。

ヘーゲルの著作は、その思想の本性上、レクシフィツイン・難いものである。又、單なる人名及び件名索引の如きは、たゞ表面的なるヘーゲル研究に役立つのみであらうし、或はヘーゲルの精神に全然反する結果を招來するかも知れない。特に彼に於て不可分

離的である歴史的並びに體系的研究に貢獻せんがためには、單なるレキシテルではなくして、有機的統一をなせるレクシコンが用意されなければならない。即ち、個々の章句を容易に發見し得るのみならず、その全文を掲げることによつて、彼の主要概念そのものによる彼の思想發展の研究、體系の異なる敘述の正確な比較も可能とならなければならない。この意味に於て、本書は單なる參考辭典たるに止らず、又讀まれる辭書であらうとする。

この書は全集第二十三―五卷を構成し、十二分冊より成る。一分冊は一〇ボーゲンを含むから、全體では一九〇〇頁を越えるであらう。各分冊は三ヶ月毎に發行される豫定で、全集豫約者は新に申込を要せず、一分冊八馬克で配本される。尙レクシコンのみの豫約者には一分冊九馬克で提供される。

Hegel-Lexikon. Von Hermann Glockner (Hegels Sinn-  
liche Werke. Jubiläumsausgabe. Bd. 23—25) Stuttgart: Fr.  
Frommanns Verlag (H. Kutz)

### 基督教思想の理解

近來、我が國に於ても、基督教、カトリシズム、中世思想等に就いて語られることが多い。その中には、動搖の現代からの單なる逃避に過ぎないやうなものも見受けられるが、多くは西洋思想の源流に溯つて、觀念、思想の生成を究めようとする眞面目な努力であることは喜ばしい。實際、カント以前の近世哲學、否カント哲學そのものも、中世哲學の理解によつて、その解釋を新にさ

れ、或は少くとも、閉ざされた一面を開くことが出来るであらう。

その未完成の「スコラ的方法史」二卷をはじめ、學界未踏の領域を開ける幾多の輝ける研究を有する斯界の第一人者マルティン・グラーブマンの新著「カトリック神學史」こそ、待望の書といふべきであらう。本書は、カトリック神學を、その主要な諸形態と諸傾向とに就いて敘述してゐるが、その評價の正確、記述の明快、誠に我々の期待に背くものではない。特に、著者の専門である盛期スコラ哲學と獨逸神祕思想の部分に於ては光彩を放つてゐる。併し、後期の敘述に於ては、稍無味乾燥の嫌がないではなく、たゞ人名と書名との羅列に過ぎない部分さへある。併し、このことは本書の參考書としての價值を毫も減じるものではなく、それは、卷末に附せられた詳細な文献目録によつて益々高められてゐる。

併し、カトリシズムの傳統に通じない讀者には、幾百の神學者の名を知るよりは、その二三の代表者によつて、哲學と神學との主要問題に導かれる方が優つてゐるであらう。又、その手引として、シルソンの三部作、アウグステイヌス、ボナヴェントゥーラ及びトミスム、又はセルティランジュのトーマスを擧げることには何人も異論がないであらう。即ち、これらの書は、近代語で、中世教會の三巨人の世界像を提示し、現代的意義を有しない部分は簡単に述べるに止め、世界觀の形而上學的基礎に重點を置いてゐる。その中シルソンのトミスムは諸國語に移されて多くの讀者を得てゐるが、他の三書にも獨譯があり、しかも今度發行所の移渡と共に、從來の半價以下に引下げられることによつて、益々我

々に近づき易いものとされてゐる。

既に邦譯をも有する「カトリシズムの本質」と鋭感な研究「アウグスティヌスの精神的發展」の著者として知られてゐるカール・アダムの最近の著書に「イエズス・クリストゥス」がある。この大部の書に於て、彼は自由主義的プロテスタントイスマの聖書批判を厳しく斥け、基督の全き人性と神性とをば、カトリックの立場から闡明してゐる。しかも、この書は二三十年來屢々現れたカトリックの有難い説教本とは、その嚴密な客観性によつて、區別されるべき學術書である。

尙ほアウグスティヌス及びトーマス・アクィナスに就いても、注目すべき二三の研究が現れてゐる。併しそれ等並びに昨年十一月十日生誕四五〇年を祝はれたマルティン・ルッテルに關する幾多の新文献に就いて述べることは次の機會に譲らなければならない。

Martin Grabmann: Die Geschichte der katholischen Theologie seit dem Ausgang der Väterzeit. F. B. r.: Herder & Co., Km. 920; in Leinen Km. 10.20

Stefan Gilson: Der heilige Augustinus; derselbe: Der heilige Bonaventura; A. D. Serflanges: Der heilige Thomas von Aquin. Heideberg: Verlag F. H. Kerbe. in Leinen je Km. 7.80

Karl Adam: Jesus Christus. Ausgabe: Haas & Grabherr.

## 古典の世界

この方面に於ては、嚴密な批判を経た原典の刊行、信賴すべき翻譯、並びに古典的ともいふべき研究の再版が特に注目し値する。さきに、ビュテの叢書に、「シムムホシオン」を出したロバンは、最近「バイドロス」の業を了へた。この「プラトーンの愛の教説」の著者は、二つの愛に關する對話篇を出す機會に、問題を再び取上げた。そして、彼の新しい研究の結果を兩書の各百數十頁にも達する序説に述べてゐるが、紙面の制限は、勢、舊著の參照を讀者に要求せねばならなかつた。かくして、既に稀觀本に屬した本書は、再び我々に近づき易いものとされたのである。

古くから、信賴すべきテクストと讀み易き翻譯とを以て開えたロウプ叢書は、既刊のもの二七〇巻を超えたが、古典の海涯なく尙ほ新に出づるものの数は測り知り難い。新刊中、注目すべきは、アリストテレス「形而上學」上巻とセクストゥス・エンピリクス第一巻とであらう。後者の譯者は、かのプラトーンの「パイレーホス」及び「シムムホシオン」の校訂出版、並にその他の研究によつて知られてゐるビュアリである。彼の「シムムホシオン」は、今度若干の正誤と、初版(一九〇九年)以後の新研究に對する論評として、序説に七頁の増補を加へて、本年新版を出した。

併し、古典の世界で最も多くの讀者を得たのは牛津の碩學ギルバート・マレーの「アリストファネス」であらう。實際、現代は、彼の如き偉大なる「笑ひの哲學者」の復歸を要求してゐる。併し、彼の笑ひは、無邪氣な笑ひでもなければ、又對象を憎しみ、嘲る笑ひでもない。彼の笑ひは、人間の理性に根據を有する笑ひともい

ふべきであらう。彼の内心は、民族と民族との交友を希ひ、階級と階級との融和を望んでゐる。彼は愚衆の借上を憎むと同時に、ミリーテースの専制とその残酷とを嫌惡する、人間の研究者である。彼の主題は、平和と詩と哲學的人生批評とである。彼はこの三者に就いて笑ひ、笑はざるを得ない。但し、第二に就いては笑ひを憚まざるを得ない。蓋し、平和の喪失は、終極に於て生全體の動物的なる權力への屈服を意味し、それは、「喜劇の王」といふつゝすら、笑つては過せぬ恐ろしいものであるから。

現實の問題から歴史の世界に眼を轉じるとき、新プラトーン派の最後の代表者であり、その中世哲學に與へた影響に關して過重視し得ないプロクロスの主著「神學原理」の校訂刊行が見出される。編者はバーミンガムの希臘語教授ドック博士であり、忠實な翻譯と精細な註釋を附した良心的な出版である。

ミュンツェルの「プラトーン及びアリストテレースに於ける數と形相」は再版を出した。その後の研究に於ける約四〇頁の増補が附せられてゐる。彼及びテオプリッス等を中心とする、嚴密な文獻學的研究に基き、特にイデア説をギリシヤ數學との聯關に於て見ようとするプラトーン解釋は最も注目し得るものであらう。彼等の業績は、機關誌「*Quellen und Studien zur Geschichte der Mathematik, Astronomie und Physik*」(最近第二卷第四册が出た)に於て見られるが、その所説の最もよき概観は本號譯載のミュンツェル自らの報告によつて與へられてゐる。

Platon: *Oeuvres complètes*, Tome IV, 3: *Phédro*, texte

établi et traduit par L. Robin. (Coll. Budé) Paris: Les Belles Lettres. frs. 30.00

Léon Robin: *La théorie platonicienne de l'amour*. Nouvelle éd. (Coll. historique des grands philosophes) Paris: Félix Alcan. frs. 30.00

Aristotle: *Metaphysics*, with an English translation by Hugh Tredennick. Vol. I (Bk. I-IX) (The Loeb Classical Library) London: William Heinemann. 10/-

Sextus: *Empiricus*, with an English translation by the Rev. R. G. Bury. In 3 vols. Vol. I. (The Loeb Classical Library) London: William Heinemann. 10/-

The Symposium of Plato. Ed. with introduction, critical notes and commentary by R. G. Bury. 2. ed. Cambridge: W. Heffer & Sons. 7/-

Gilbert Murray: *Aristophanes: A study*, Oxford at the Clarendon Press. 7/6

Proclus: *The elements of theology*. A revised text, with introduction and commentary by J. R. Dods. Oxford at the Clarendon Press. 20/-

Julius Stenzel: *Zahl und Gestalt bei Platon und Aristoteles*, 2. erweiterte Aufl. Leipzig & Berlin: B. G. Teubner. In Latin-Rm. 12.00

我が國に於ては、希臘哲學の尊嚴たるを研究は二三現れてゐる

が、特に擧ぐべきは、岡田正三氏が單獨でプラトーン全集講譯の偉業を計畫され、メノン、カルミデス附イオン、ゴルギアスの三卷を公にされ、しかもその巧な語句の驅使によつて、多くの讀者をプラトーンに導き、絶大の賞讃を博されたことである。併し、氏の前には多くの困難が横つてゐる。我々は、一層哲學的内容の豊富な、そして今日最も關心をもたれる後期の語對話篇も、氏の明快なる筆によつて國語に移されんことを切望する。

最近に、東京河出書房はアリストテレス全集の出版を豫告してゐる。全二十卷より成り、豫約法によらず、單行本として刊行される由である。その大部分は既に譯者も決定して、近く刊行豫定のものも二三ある。本誌關係者で參加されるのは、山内得立氏(トピカ)藤井義夫氏(分析論)田中美知太郎氏(生成と消滅)高田三郎氏(ニコマコス編倫理學)石山修平氏(大道徳論)小田清氏(エウテモス編倫理學)等である。(以上服部英次郎輯)

## 新刊紹介

一一二

### 心理學論文集 第四輯(日本心理學會第四回大會報告)

心理學は醫學生物學等と同様たえずホジチヅな研究によつて進歩を續けて居り心理學の専門的研究に従事するものも一般に心理學に關心を持つものも之を無視してその正當な認識を得ることは出来ない。かゝる研究はまた烈つた著書に於てよりも雜誌に於て學會に於て發表されることが多いが、雜誌は比較的詳細な記述を許す代りその研究は相當纏つたものたるを必要とし掲載される論文の數も相當限定されて來る憾みがあり、かくて心理學界の現狀に對する概觀的認識を得るに便である點に於ては簡單にして數の多い心理學會の發表を尙ふに著くはない。此の「心理學論文集」もさう云ふ學會の報告として貴重な便利な文獻であると云はればならぬ。

収録せる研究は宿題報告「意志と行動及び個性」(大脇)、「無意識の問題」(小山、高橋、千葉、丸井、小宮、勝本)の外、「覺の成立條件」(黒田亮)、「精神生活と獨立體系の基礎的聯關」(増田惟茂)等の基本的なるものから音響、色彩乃至運動、比較等に關する一般心理學的なもの、兒童心理學、未開人の心理學、精神分析學、産業心理學等に至る各領域にわたるもので其の數八十五に上つてゐ